

『比翼連理』

著：あさひ木葉

ill：小路龍流

「……んっ、く……」

口唇に、熱い感触。

何者かが、侵略してくる。

まるで、炎のごとく。

口内に背德的なほど甘い蜜の味が広がったところで、桂希は意識を取り戻した。

目を見開く。

重苦しいほどの闇が、桂希にのしかかってくる。

(どこだ、ここは)

自分が横たわっていることに気がついた桂希は、そのまま起き上がろうとした。

ところが、手首がひとつに縛められた上に、どこかに固定されているらしい。上半身の自由が利かない状態だった。

おまけに、足首にも拘束具の感触がある。

(一体、私はどうなったんだ)

気を失う寸前の、どうにかしているとしたか言いようがない龍恩や黄武帝の言葉を、桂希は思い出していた。

男である桂希を孕ませるといふ。

彼らは、何を考えているのだろう。

そして、龍恩は何をを考えて、おめおめと桂希の前に姿を現したというのか。

(あの裏切り者め……！)

ぎりぎりと、桂希は奥歯を噛みしめる。

龍恩は良心の呵責などないと、言わんばかりの顔をしていた。

あの、ぞっとするほど冷たい横顔。

彼のことを、どうして許せよう？

「目を覚ましたか」

闇の中から、冷ややかな声が響いてきた。

「……龍恩！」

体の自由は利かない。

だが、桂希のこの憎しみまでが抑えこめるものではない。

目をこらす。

おぼろに、闇の中で憎い男の影が浮き上がった。

彼は横たわった桂希の顔を、覗きこんでいた。

「どうだ、具合は？」

桂希の敵意を無視するような態度で、龍恩は尋ねてくる。

そんな氷のような男に、どうにか自分の憎しみと怒りを伝えたくて、桂希は嫌悪感を露わにする。

己の憎しみに、龍恩を傷つけたかった。

「貴様の存在が目の前から消えてくれない限り、快適にはならない。早く、私をここから出せ」

龍恩は、あくまで冷静な態度を崩さない。

「そうはいかない」

龍恩は、桂希の頬に手を触れてきた。

「おまえから、目を離すことはできない」

「……どうということだ」

「今、おまえの中を陰陽の気の流れを変える仙薬が巡っている」

そう言いながら、龍恩は桂希の頬から下へと手を動かしていく。

そして、いきなり襟元に手をかけたかと思うと、一気に桂希の衣を引き裂いた。

「……なにを……っ！」

あまりの狼藉に、桂希は白皙の頬を赤く染めた。

仙薬などと、怪しげな術の力を使い、龍恩は一体何を為そうというのか。

「言っただろう？ 俺とおまえは血を交わせ、ひとつの血統として暁の皇族の祭祀を司る」

真顔で龍恩は言う。

「俺とおまえが、二人で生きるために」

桂希にとっては、とても正気とは思えない発言だった。

「……私は、男だ……」

上擦った声で、桂希は呟いた。

衝撃のあまり、ろくに言葉も出てこない。

「生きたければ、おまえ一人で生きるがいい！」

龍恩の生への執着を、蔑むように桂希は吐き捨てた。

二人で生き残るなど、そんなことを桂希はまったく望んでいない。

「生きるなら、俺とおまえの二人一緒だ」

「どうして……！」

「それが、俺の望みだからだ」

「私は望んでない！」

桂希は気色ばむ。

今の龍恩には、ある種の気味の悪さすら感じるほどだ。

とても、言葉が通じているように思えない。

「わかっている。だからこそ、仙術を使った」

悪びれもせず、龍恩は言っただけだ。

「おまえに、俺の子を産ませる」

「……っ」

思わず、桂希は絶句する。

本当に、目の前の男は龍恩なのだろうか。

彼が裏切ると考えたことすらなかった桂希が、龍恩をよく知っているとはとても言えない。

それはわかっている。

だが、少なからず同じ戦場にいたこともあるし、かつては学友だったのだ。

知らぬ相手ではないはずなのに、今の桂希には龍恩が得体の知れない未知の存在にしか見えなかった。

龍恩の眼差しは、明らかに欲情を孕んでいた。

ぞっとするしかない。

桂希を母に重ねた皇帝に、そういう目で見られたことが度々ある。さすがに、寝所に召されることはなかったものの、桂希にとっては辛い記憶だ。

まさか龍恩にまで、こんな目で見られるとは思ってもみなかった。

「……私は母では……、芙蓉美人ではない」

桂希は、掠れた声で呟く。

「なぜ今、その名が？」

龍恩は、訝しげに眉を顰めた。

「……では、どうして私をそんな目で見ると」

「俺は、彼女に会ったこともない」

龍恩は、忌々しげに呟いた。

「だから、どこかの誰かのように、いなくなった女の面影をおまえに求めることもあるわけがないだろう」

「……っ」

かっつと、頬が熱くなる。

羞恥と怒りとが、こみ上げてくる。

公には父である皇帝に禁忌の欲を抱かれていたことを、龍恩にも知られていたとは……。

「俺が望むのは、おまえだけだ」

真顔で、龍恩は言い切った。

その力強い言葉に、桂希の体は知らず震えた。

目の前の男を怖れているなどと、認めたくはない。

しかし、そう思わずにいられなかった。

「黄武帝も、俺の気持ちを認め、興じている」

黄武帝の舐め回すような視線を思いだし、ぞわっと桂希の肌が粟立つ。

桂希の体を、子を生せる存在にすることを許すと、黄武帝は言っていた。

あの猥雑な戯れ言は、本気だったのだろうか。

あやしげな仙術の力を、使って……？

冗談じゃなかった。

誰が、黄武帝を興じさせてなるものか。

龍恩の思い通りになんて、絶対にならない。

「私を殺せ！」

「断る。おまえは、今から俺の妻になるんだ」

龍恩は、あくまで冷静に言い放った。

「葉は、陰陽の交わりを経て、効力を得るそうだ」

龍恩は、桂希の言葉を一切聞かざるつもりはないようだ。ただ、自分の欲望を、桂希に押し付けることを考えている。

吐き気がした。

国を裏切った男なのだ。

なにをしたっておかしくない。

そう思う反面、桂希は心のどこかで、龍恩という男を信じたいと願っていたのだろうか。

こんな男とは思わなかった、裏切られたという気持ちが、何かの間違いだと思いたい気持ちが、どうしても消えてくれない。

(私は愚かだ)

桂希は、歯噛みした。

結局のところ、桂希は龍恩との思い出に縋っているのかもしれない。

桂希を一人の人間としてまともに扱ってくれた、ぬくもりを感じさせてくれた男を、どうしても悪く思いたくないのだ。

拘束された状態の桂希の上に、龍恩は乗り上げてくる。

みしりと寝台が軋み、彼の重みが伝わってくる。

あらためて、恐怖心が沸き上がってきた。

龍恩が正気とは、とても思えない。

本気で桂希を孕ませるつもりなのだろうか。

「おまえは今から、俺のものになるんだ」

「やめろ……っ」

「やめない」

感極まったような掠れ声で囁いた龍恩は、噛みつくように口づけてきた。

あたかも、情熱をぶつけるような。

「ようやく、おまえを手にいられる」

その声には、隠しがたい歓喜が滲んでいた。

「……ふ、く……っ」

息が苦しい。

初めて奪われた接吻は、まるで噛みつくようなものだった。

桂希の口腔を貪る龍恩は、最初ひたすら勢いまかせだった。それが、少しずつ味わうように、顎を咀嚼させるように動かして、桂希の頬の内側を堪能し始める。

初めて口内で感じた他人の舌は肉厚で、ざらっとしていた。

そして、無遠慮すぎるほどに、桂希の中を這い回る。

桂希を味わうような、接吻だった。

彼の舌が口内で動きまわると、それにつられて蜜のような甘味が広がっていく。その不自然な甘さに、背が震えた。

(仙薬か……?)

既に術がかけられているのであれば、薬はまた別のものか。

何にしても、このままでは龍恩のいいようにされてしまう。

必死で、桂希は身じろぎした。

「……んっ、ふ……。ふうう……っ」

「……っ」

入ってきた舌を噛んでやろうと顎に力を入れるが、上手くいかない。

龍恩は怯むどころか、喉奥まで舌をねじこんでくる。

思わず、桂希は噎せてしまった。

「ぐっ、ごほ……っ」

不意に、龍恩の口唇が離れる。

呼吸が楽になって深呼吸するが、体の拘束は外れない。

「放せ、この……！」

「なぜ、放さなくてはいけない？」

桂希が呼吸したのを見計らうように、もう一度龍恩は口唇を求めてきた。

強引に重ねられる口唇、ねじこまれる舌に、再び桂希の呼吸は奪われてしまう。

「ぐっ、う……」

息苦しい。

頭の芯まで痺れる。

思考が白んでいく。

そんな中でも、常に危機感があった。

このままではまずい。

取り返しのつかないことになってしまう……。

そんな予感に、桂希は追い詰められる。

体は、むやみに熱くなっている。

それは、桂希にとっては未知の感覚でもあった。

仙薬を飲ませたと、言われた。

その結果、桂希の体に何が起こりうるのか。

(孕ませるだと?)

妄言としか言いようがない。

桂希は男だ。

男を孕ませようだなんて、まともな人間が思いつくことではないだろう。

いくら仙術を使うとはいえ、そのようなことが可能なのだろうか。

悪い冗談としか思えない。

だが、不可能とは言い切れないのが、恐ろしいところだ。

この世界には、仙道を極めて、仙術によって森羅万象を自由自在に操る者たちがいるという。

彼らを導師と呼び、地位のある者たちが相談相手として傍に置くことも珍しくない。

桂希の父である輝帝にも、導師がいた。

生まれ落ちてはならないはずの桂希という存在を、どうするのか。悩んだ輝帝に、『桂希の命に意味を与える』ということで、生かす理由にすればいいと入れ知恵したのもその導師だった。

桂希に、生まれながらある宿命を背負わせたのも仙術だ。

だから、桂希は仙術の効能というものが、一人の人間の人生を変えうるものであるということ、よくよく知っていた。

(確かに、黄武帝にもお抱えの導師がいる。あの男が薬を調合したというのか)

桂希の運命を変えてしまう仙薬を。

身の底から震え上がる。

このまま、桂希は男でありながら、孕むことができる体に変えられてしまうのだろうか。

仙術により人生が変わるのは、これが初めてのことでなかった。

それゆえに、桂希は熟知している。

仙術の恐ろしさ、その絶対的な力を。

(私は本当に、龍恩の子を孕まされてしまうのか?)

体の上にのしかかる重みが、これほど恐ろしいと思ったことはない。

恐怖に突き動かされるようにもがくが、拘束具だけではなく、龍恩自身もまた桂希を寝台に縫い付ける枷となっていた。

「……っあ！」

思わず、桂希は悲鳴を上げてしまう。

もがいた罰だとでも言うかのように、龍恩があらぬところに触れてきたのだ。

他人になど、触らせてはならない場所へ。

股間へと……。

「どこを触っているんだ、この痴れ者め！」

「随分、初心な反応をするな」

龍恩は、ぐいっと桂希の顎を掴みあげる。

「おまえにとっては、今後は不必要になる場所だ。俺が愛でるためにだけ存在するものになるんだ」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>